

隠岐の植物の世界

隠岐では夏と言えば海!というイメージが強いですが、実は山や海岸沿いには美しい花々がひっそりと咲いています。いつも通っている馴染みの場所でも、植物

に目を向けると違った景色に見えてくるかもしれません。今年の夏は足元の草花や、樹木を観察してみるのはいかがでしょうか?

初夏～夏にかけて観察できる隠岐の花

●山の中で見られる植物



ウバユリ



ベニシュラン



ナツエビネ



クサギ

●海岸沿いで見られる植物



トウテイラン



ハマゴウ



コオニユリ



ツリガネニンジン

(一社)隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会と隠岐観光協会が合併しました!

令和4年4月1日から一般社団法人隠岐ユネスコ世界ジオパーク推進協議会は隠岐観光協会と合併し、新組織「一般社団法人隠岐ジオパーク推進機構(以下、ジオ推)」となりました。新メンバーも迎え益々パワーアップして、皆さまのお役に立てるように活動してまいります。

ジオ推では、隠岐ユネスコ世界ジオパークの事務局としての活動や、観光地域づくり法人(DMO)としての活動を行っております。これらの活動・事業内容は、広報誌に限らずホームページやFacebook等で発信しております!

ぜひご覧ください。



編集後記

初夏の晴れ晴れとした青空がうれしい季節となりました。皆さまいかがお過ごしでしょうか。この度新しいオキドキを刷り上げるにあたって、また一つ私達オキドキ編集部も隠岐の文化について知見が深まりました。奥深い魅力いっぱいの隠岐ジオパークを、今後とも発信していきたいと思ひます。



unesco

Global Geopark



(発行元)

(一社)隠岐ジオパーク推進機構

Oki Islands Geopark Management Bureau

〒685-0013 島根県隠岐郡隠岐の島町中町目貫の四 61 番地

Tel:08512-2-1577 / 08512-3-1321(総務) Fax:08512-2-1406 / 08512-3-1322(総務)

E-mail:info@oki-geopark.jp URL:http://www.oki-geopark.jp/



隠岐を知り地球に出会う

オキドキ OkiTtimes

Vol.16

2022年 夏号

隠岐ユネスコ
世界ジオパーク



隠岐 × 後鳥羽上皇

～ごとばんさんの場所集う～



村尾茂樹(むらおしげき)さん

海士町出身。昭和45年生まれ。國學院大學を卒業の後、平成5年から21年まで神社本庁に奉職。その後海士町にUターンし隠岐神社の禰宜に。現在は島内の5つの神社の宮司も兼務。海士町議会議員、文化財保護審議会、島根県神社庁非常勤職員など、多岐に渡る活動を行う。

ごとばんさんの場所に集う

昨年から今年にかけて海士町で執り行われる大祭「後鳥羽院遷幸八百年祭」は、今や全国から注目を浴びる祭りとなっている。

今回お話を伺ったのは、八百年祭の中心にいる人物、村尾茂樹氏。

海士町で生まれ育ち、隠岐神社の禰宜として後鳥羽上皇ゆかりの文化と共に生きる村尾氏の人生と、八百年を迎える今だからこそ見つめる未来についてお話を伺った。



隠岐神社について

隠岐神社は後鳥羽上皇(後鳥羽天皇、後鳥羽院)をお祀りする神社で、昭和14年(1939)に創建されました。上皇は、承久3年(1221)に承久の乱に敗れ隠岐にうつってこられたお方で、お隠れになるまでの19年を海士町で過ごされます。その後は上皇の墓所でお祀りを行っていましたが、昭和に入り島の歴史と文化の新たなシンボルとして隠岐神社が創建されました。

「ごとばんさん」を通して町民をつなぐ場に



創建以降、多くの町民が足を運ぶ隠岐神社。境内での出来事や出会い、80年ほどの歴史の中で、隠岐神社は町民にとっての思い出の場所の一つとなっています。

島民から親しみを込めて「ごとばんさん」と呼ばれる後鳥羽上皇。本来は上皇のお祀りをする場所を指す言葉であったようですが、今では島での後鳥羽上皇の人物像も含んだ使われ方をしています。そんな

なことを背景に、隠岐神社の存在は、島民の心根にあると村尾さんは話します。

村尾さん：「日本史という点から見ると、後鳥羽上皇は日本の時代の一時期を集約したような方です。一方、島の人から見れば『ごとばんさん』という親しみのある島暮らしの達人みたいで、今で言うUターンの走りみたいな存在にもなるでしょう。上皇の島でのご功績を学ぶことで湧いてくるエネルギーを後世に残すということも含めて、町の人がごとばんさんと親しむ場所となる神社として完成しています。上皇のお祭りをキーワードに、町民

が島の歴史を顧みながら集える場所という位置づけですね。それに神道の信者さんだけが来るわけじゃなく、海士町の人個人は個人の信仰とかそういうものを超えてみんなが『ごとばんさんの場所に集う』っていうのも、これも現代では本当に珍しい例だと思いますよ。」



後悔しない生き方を

海士町で生まれ育った村尾さん。実は幼少期は神社への関わりは薄く、お祭りへの参加も少なかったそう。小学生の時の作文には、将来の夢はタクシードライバーとも書いていたり。隠岐神社との関わりの中で、自らの選択肢を広げるために高校卒業後は東京に進学。神職資格を取得するも、卒業後に地元へ戻る選択肢はなく、そのまま東京の神社本庁に奉職し、16年間勤務されました。

そんな村尾さんがなぜ海士町に戻る選択肢を選んだのか。

村尾さん：「ごとばんさんだっただけにこられたことを後悔してたらさ、それだけで島に来てから20年も生きられない。だから後悔しない島にすりゃいいと思った。」

海士町に戻るきっかけとなったのは、ある二つのタイミングが重なったためと村尾さんは話します。現宮司さんのお父さんがご病気になってしまったこと。そして、そのタイミングでお子さんが産まれ

たこと。子供の将来の選択肢を増やすため、海士町に戻る決意をしました。

「都会にはいざれ行くでしょ、だからこそ小さい時に自分の原点がどこにあるのかを知っておくことは悪くない」と考えたのです。このタイミングだからこそ島に戻り、隠岐神社に戻り、頑張ろうと決意を固めたそうです。どこにいても自分らしく後悔しない生き方をすればいい、どこか後鳥羽上皇とも通じる村尾さんの生き方が、Uターンへの後押しとなったのです。

後鳥羽上皇が島にうつられて八百年というのは一つのきっかけにすぎない

百年に一度の大祭「後鳥羽院遷幸八百年祭」は、神社の神事と日本文化の伝統を新しい時代に継承しようとする祭りです。この大祭という舞台で果敢に挑戦を続ける村尾さんを動かす原動力は何なのか、その思いや目指すべきところを伺いました。



村尾さん：「ごとばんさんの伝統を引き

継ぎ、なおかつ未来に繋ぐことは一筋縄ではいきません。でも、逆境の中でも伝説級のことをやり遂げた後鳥羽上皇が島には鎮まっている、これが私のモチベーションです。だからこそ、どんなことでもやってみる。動き始めてしまえば出来ると信じています。

後鳥羽上皇がなされた文化的な偉業、活動を再現し、その過程で様々な技術の発見であったり、学びが生まれると思うんです。八百年祭では、そういうことを大切に。これまでの隠岐と後鳥羽上皇の積み重ねに学ぶ過程での出会いとか、技術や気付きとか、海外との比較だとか、そういうものを経て生まれてくる何かがあると今回のお祭りは深みを増してくると思います。

そして、島の人の口からもっと「後鳥

羽上皇」や「ごとばんさん」という言葉が聞こえてきたら嬉しいなと思います。八百年祭の行事も二種類に分かれていて、島外の文化伝承者や研究者、さらには歴史・文化ファンとの連携向けに大々的に行うものと、島内の人に『ごとばんさん』という言葉が発してもらいたいという行事。島民劇なんかは後者ですよ。ごとばんさんの由緒の島として、背伸びしてでもみんな頑張るって行事をやり遂げる。やり遂げるためには、町の人いろいろな協力も島外の人協力も必要だから、みんなのいいところを引き出せる。みんなの関係を手繰るチャンスなんです。手繰った結果が島というフィールドを超えて影響を及ぼすことにより、海士町は後鳥羽上皇ゆかりの文化の島って言えると思うんです。」

次の百年へ

村尾さん：「海士町の隅々までごとばんさんらしい、後悔しない挑戦する姿勢が届いていけばいいかなと思います。そして『ごとばんさん』っていうキーワードのもとみんなが集まる、そんな光景が続いていけばと思います。考え方や生活スタイルがバラバラだったとしても、桜の

咲く頃に隠岐神社にやってくる、後鳥羽上皇のお祭りならみんなで協力してやっかあ、そんなことが当たり前であり続ければ、それがその人にとっての後鳥羽上皇文化なのだと思うし、海士が続いている証の一つだと思います。」

